

定期刊行物

16.9.0

昭和十三年十一月十日 第三種郵便物認可
昭和十六年八月廿八日 印刷納本
昭和十六年八月三十日 發行 (毎月一四三十日發行)

昭和十二年十一月十日第三種郵便物認可
昭和十六年七月三十日發行

日滿經濟論壇第五十二號(七月號)

(集談論信維宮三)

日滿經濟論壇

昭和十六年八月五拾參號

卷頭言——敬神崇祖の眞意義

世界大勢と經濟的臨戰體制の現狀

——我重大時局の解剖——

世界大戰の勝敗を決するものは武力戦か經濟戦か!!
高度國防國家體制整備の根本問題

——論叢——

皇道經濟論 (其七)

第貳編 流通經濟論

第貳章 需要編

25x□

32x□

25x

目次

- 一、卷頭言——敬神崇祖の眞意義
- 二、世界大勢と經濟的臨戰體制の現狀
 - 一、世界大勢と新秩序建設工作の動向
 - 二、臨戰體制の二動向
 - 三、獨逸の臨戰體制と我國の現狀
- 一、論叢——皇道經濟論（其七）
- 第二編 流通經濟論（二）
- 第二章 需要編
 - 一、現代經濟論に於ける價格體系と需要
 - 二、國民需要と消費規正
 - 三、消費規正と價格體系

以上

敬神崇祖の眞意義

近來、敬神崇祖と云ふ事が八益しく事毎に口の端に上る様になつて來たと同時に、神詣りや佛參りが盛んに行はれる様になつて來た様である。之は誠に結構な現象と云へば云へる譯であるが、之丈の事で敬神崇祖の意義が徹したものと考へられては大變な誤りである。誠に敬神崇祖の眞意義は神詣りや佛參りをする事では無い。然らば敬神崇祖の眞意義とは何ぞと云ふに、其は人間が身も心も總べて神に歸一し奉る事である。即ち人間の心の淨化であり人格の完成である。淨化したる心、完成したる人格、之れこそ神の喜び給ふもので、穢れたる身心を以て神前に立たる、事は神の最も厭ふ處である。

而かも斯る人間は神前に立つと、必らず「家内安全」「立身出世」を祈願する。然し眞の人間の神に祈念し奉る事は斯る利己的のものでは無い。其は人間の心が淨化せられ人格が完成して來るに従つて明かに體得さるゝ處である。然らば敬神崇祖の眞意義に徹する道如何！

神道に於ける「みそぎ」佛教に於ける「禪」も其一方法かも知れ無い。然し之等は多くは自己満足に墮し増上慢に陥り、利己慾のみ強くなつて、却而、始末の悪い人間が出來るのが常である。聖僧日蓮が「在家の行」と稱して日

常生活に於ける行を説かれたのは此の爲である。毎朝、神を拜し、祖先を祭り以て、國家國民の安泰を祈る。之である。然し此心を終日持續ける事は困難である。更に、人間が自己の幸福、自己一家の安泰を神佛に祈念して居る間は、決して神の加護も佛の救護も獲得する事は出来ない。唯得らるゝものは空虚なる自己満足のみである。「利己慾」の爲めに神を拜し佛を敬ふ。之位元らぬものは無い。神道の「みそぎ」も佛敎の「難行苦行」も此境地より發して居る限り全く元らぬ行事と云ふべきである。

誠に人間が神を拜し佛を敬ふ所以は、自己が此世に生を受けた意義を明らかに體得し以て、之が使命の完遂を期する事にある。同時に俗人の云ふ所謂立身出世と云ふ事が如何に元らぬものであるかと云ふ事を正しく認識する事である。茲に於て一國の大臣の持つ人生觀も、一商人の持つ人生觀も、一労働者の持つ人生觀も全く一つに歸一する譯である。茲に職域奉公の眞意義があるのである。

然るに人間が此理を悟り得ず大臣が政權慾に囚はるゝの餘り素りに政機を弄斷して、國運の進展を抑止し國民に塗炭の苦を味はしめ國家を亡國の悲運に陥れる如き事あらんか、又は商人が自己の利益に感觸して不正の利を貪る如き事あらんか、或は労働者が賃金のみ貪つて怠惰に流るゝ如き事あらんか、之は正に神を冒瀆し自己の祖先を奈落の底に叩き落すの所行と云ふべく、敬神崇祖の眞意義は全く失はるゝ譯である。

誠に人間は此の境地を解脱するので無いならば、常に自己の利己慾から来る煩惱業苦に責められて一家の不幸を招き病魔の根因を爲すのみならず種々の災厄に冒さるゝ結果になる。之れ正に天理の應報と云ふべく、斯くして眞の安

心立命は得難き譯である。實際に於て今日の宗教者は概ね此の眞意義を無視して徒らに宗教を科學化する事に依つて利己慾を満足せしめんとして居る。斯くの如きは信仰の本義に反するもので、大政覽發會のみそぎ行事の如きは、正に其好ま例である。誠に敬神崇祖の眞意義は、心の淨化に始り自己人格の完成を明し以て、祖先の遺業を顯彰する事を以て終りとする。而して神詣り佛参りは其の感謝の表徴であらねばならぬ。

敬神崇祖を口にしながら日常生活に於て、神を冒瀆し先祖の遺業を無視せる輩が多い現代世相に鑑み、茲に敬神崇祖の眞意義を明らかにして、其反省に資する次第である。(昭和十六年八月十三日)

世界大戦と経済的臨戦体制の現状

——我重大時局の解剖——

一、世界大勢と新秩序建設工作の動向

第二次に亘る世界大戦が齎らした世界新秩序建設の目的が世界全人類の幸福を中心とする恒久的世界平和の確立にある事は今更贅言を要せざる處である。

然して第一次世界大戦は世界的ブルジョワジー國家の勝利を以て終り第二次世界大戦は世界的ブルジョワジー國家の敗北を以て終らんとして居る。

茲に於て世界の大勢は、世界の新秩序建設に集中せられて居るかの觀がある。之に對して世界的ブルジョワジーの代表國家たる英米兩國が總ゆる對抗策を講じつゝある事は周知の事實である。此の世界大勢の中にあつて我國が東亞を中心とする新秩序工作の完遂に邁進しつゝある事は之亦、國民周知の事實である。

然るに最近の世界情勢は、獨蘇攻防戦の深刻化に伴ひ獨伊の経済的抵抗力の低下が豫想せらるゝに及び世界的反ブルジョワジーの代表國家たる獨伊兩國側と世界的ブルジョワジーの代表國家たる英米との妥協機運を醸生しつゝあ

る事は否定し難き事實である。之は正に世界の新秩序建設工作の動向を示唆するもので、東亞新秩序建設途上にある我國として重大の關心事と云ふべきである。

茲に於て獨伊の云ふ世界新秩序建設と我東亞新秩序建設の内容を比較検討して見る必要がある。而して獨伊側の示せる世界新秩序建設への目標は、民族自決主義を中心とする領土保全にあり獨立國家の再建は其の表現である。之は我東亞新秩序建設と全く其軌を一にするものであるが、茲に最も難關とする處は、反ブルジョワジー國家が獨立國家の再建に當り其面目を堅持するに足る経済的内容を如何にするかと云ふ事である。之は世界新秩序建設に伴ふ世界經濟の再建を意義するもので、此の問題が解決するに無ければ如何に武力戦に勝利を得ても、結局は世界的ブルジョワジー國家の軍門に降らざるを得ない譯である。英米側が最後の勝利を豪語する所以である。此事は我國内にも見らるゝ問題で、現在の如く國內革新の要が焦眉の急なるに不拘、財界が既成勢力との因果關係を頼り其資本力に物を以て傲頭を誇る限り如何に國家權力を以てしても如何共爲し難き實狀である。而かも之れを無視して強力一方を以て事理を處理せんか國家經濟は破綻し全く收拾の道を失ふに至るは必然の事である。

之は世界經濟の上にも云へる事で、斯くて世界經濟の動向が世界新秩序建設工作の上に重大の防害物となつて居る譯で、英米も亦、之を重要な防禦陣地として對抗、大いにつとめて居る譯である。

二、臨戦体制の二動向

茲に於て臨戰體制に二つの動向が考へられる。即ち英米側が軍備擴充に狂奔し武力戰中心の臨戰體制の結成を期するに對し獨伊側が經濟戰中心の臨戰體制の結成に邁進する事の必要に迫られて居る事である。之は各々其弱點を補強せんとするもので、完全なる戰時體制結成上必然の動向である。

然してブルジョワチー國家側の戰時體制は、總ゆる資本力を動因して世界を壓倒する如き優秀なる軍備を裝備すると云ふ事であつて「戰爭をする」と云ふ事は第二義的に考へて居る。今日の米國の動向は、正に其狀を如實に露呈せるもので、而かも彼等は數學的に科學的に必勝を確信し得る迄戰爭を實行に移す事はしないのが常道である。茲にブルジョワチーの特質がある。英佛が獨逸の宣戰に應じたのはブルジョワチーの本質を誤つたもので、英國自體の經濟的破綻を意義するものに外ならない。獨伊側の如き反ブルジョワチー國家は機會さへ與へられれば直ちに立つ。又立つので無ければ滅亡せしめられる惧れが多分にある。從而、臨戰體制の結成も遙かに眞剣であらねばならぬ。然し之は單に形の上における臨戰體制の二動向であつて、自由主義的經濟理念には何等の相異も無い譯である。之では反ブルジョワチー的臨戰經濟體制の眞意義は含まれぬ事になる。

茲に於て經濟戰に於ける臨戰體制はブルジョワチー國家と全く異なる體制がとられねばならない。即ちブルジョワチー國家の經濟戰體制は自國の持つ經濟力を敵性國家に補給せぬ事である。貿易統制乃至は通商斷交等は其常套手段であるが、資本活動を停止せしめて信用制度の運営を極限する所謂資本凍結は、正に其の最後の手段である。之に對して反ブルジョワチー國家は自給自足體制を結成する事に努めると共に、相手國の虛を衝いて通商路を開拓して其補

給を圖る事に努める。之が一般的手段である。然し之丈では到底ブルジョワチー國家の攻勢に堪へて往く事は困難である。茲に新なる對策が講究されねばならぬ。ドイツの如く占據地域を漸次に擴大して、之が經濟力を活用して往くと云ふ事は、理想案としては誠に合理的の考へ方であるが、之が活用資材を如何にして入手するかは先づ第一に考慮されねばならぬ處である。茲に於て今日の經濟常識である處の反ブルジョワチー國家は經濟力に於てブルジョワチー國家と對立し得ぬと云ふ事實が漸次に露呈されて來ると云ふ結果になる。

然し今日の新秩序建設工作は此の經濟常識を打破するので無いならば到底實現は至難な譯である。之は今次の新秩序建設の目的が今日の世界經濟を支配して居る自由主義的經濟思想の打破にあり、之に基礎を置く現行の世界經濟組織機構を根本的に是正するに非ざれば其目的を達し得ないからである。

然るに現在の世界經濟の動向は其點に對して甚だ不鮮明である。寧ろ自由主義的經濟情勢に壓潰されん有様である。勢い武力戰も電撃的ならざるを得ない。同時に長期戰は反ブルジョワチー國家にとつて不得手のものとなる。而かもブルジョワチー國家の長期戰は巧妙なる術策の下に實現されんとして居る。

茲に於て反ブルジョワチー國家は電撃戰法の外に更に長期戰に就いて考究されねばならない。之が獨伊側に課せられた重要課題である。獨伊側が此の課題を如何に解決して往くか、最後の勝敗を決する鍵である。

要するに此の懸案は獨伊側の戰前の準備程度如何が解決するものと云ふ事が出来る。即ち開戰前の獨伊側の臨戰體制整備の問題である。

三、獨逸の臨戰體制と我國の現状

獨逸の臨戰體制を一言にして評するならば社會主義的經濟理念を基調として自由主義的資本主義經濟組織機構を整備させるものと云ふ事が出来る。之は誠に巧妙なる經濟政策である。然し之を有効に運営するには爲政者の人格が重要な役割を持つ。然らざれば社會主義的經濟理念が官僚獨善に墮し經濟活動を歪曲せしめる結果となる。加之、自由主義的資本主義經濟機構のスタッフと官僚との妥協苟合が弱小資本を壓迫し犠牲を強要する結果、國內不安を深刻化せしむる如き事態が多分に發生して来る。獨逸の臨戰體制に於ける斯る缺陷はヒットラーの人格が完全に之を防止して居る。

然し之で反ブルジョワジー國家の持つ經濟的弱點を補填し得た譯では無い。更に擴大して往く戦局に對處すべく經濟體制を整備する必要がある。茲に獨逸の糧がある譯である。

我國の臨戰體制の動向は多分に獨逸の其れと相似の點が多いと同時に其缺陷も亦相當廣範に露呈されて来た。就中金融新體制問題、國家財政問題、産業團體統制問題、中小商工業對策、物價問題、生産力擴充問題、貿易新體制問題等は最もデリケートな問題として登場して来た様である。

元來、我國の經濟政策が今日の如く幾多の難問題を露呈するに至れる所以は、官僚の社會主義的經濟理念と民間財界人の自由主義的資本主義經濟理念との對立より來れるもので、之を是正調整すべき立場の爲政者が人格的に無信念

と來て居るから問題は絶対に解決する可能性が無い譯である。而かも官僚の社會主義的經濟理念は理想である。政策に對して無定見なのは當然である。從而、現實的に自由主義的資本主義經濟理念に引摺り廻されるのは當然の成行である。加之、官僚を引廻すべき立場の自由主義者が資本家代表と來て居るから國內問題は、更に複雑化して來るの之亦當然の事である。

斯くて反ブルジョワジー國家の經濟的臨戰體制は種々なる點に於て結成が困難なる狀を露呈するに至つた。

獨逸は之に對して第一に國民總力の結集を企圖した。之はヒットラーの人格力が立派に解決した。然らば此の結集したる國民總力を如何にして活かして往くか、今日の獨逸に課せられた懸案である。然し我國の爲政者並に一部識者の如く此の國民總力を不自然なる消費規正のみ集中する如き事あらんか國民總力の結集は其點より破綻を來すは必然の事である。更に國民に忍耐力の強要の如き斷じて避けねばならない。

然らば國民總力の結集を如何にして活かして往くか、其は國民的意氣の上に爲さしめねばならない。國民的意氣の結集こそ偉大なる國民的迫力となり時艱克服の原動力たる事を爲政者は特に認識すべきである。ヒットラーが此點に特別の熱意を示して居る事は多言を要せざる處である。

然るに我が爲政者並に之に關聯する御用學者共は、事毎に時艱克服に當る絕對の忍耐力を強調して居る。然し國民忍耐力の發揮は軛まれる事に依つて爲さるゝものでは無い。誠之は國民的意氣の結集に於てのみ爲さるゝ事である人間は非常の時に非常の力を發揮する事は周知の事實である。此の非常の力を現在の儘に放任して置く時は、非常の

場合、此の力は利己的のみ働く事になる。茲に於て國民的意氣を國家意識の上に結集して置く要がある。茲に政治力の強化が問題になる。即ち爲政者の人格力の發揮であり、責任政治の確立である。ブルジョワジイ國家は、之を其經濟力に依存して或程度の頼悔が許される。然し反ブルジョワジイ國家には其餘裕は無い。茲に於て反ブルジョワジイ國家の經濟的臨戰體制には政治力強化が絶対必須の要諦となる。之が世界大戰に於ける反ブルジョワジイ國家の勝敗を決する鍵であると共に高度國防國家體制整備の根本問題である。同時に我重大時局來の強調さるゝ所以である。敢へて政府當局の深甚の考慮を要する次第でもある。(昭和十六年八月十九日)

論 叢

皇道經濟論(其七)

第貳編 流通經濟論

第二章 需要編

一、現代經濟論に於ける價格體系と需要

現代經濟論に於ける價格體系は需要の法則に基準する。従而、需要の増大が價格騰貴の要因たると共に、需要の減少が價格下落の要因となる。之は價格と需要との循環的關聯性を示現して居る。然して現代經濟論に於ける需要は消費者の主觀に基く。茲に主觀價值論の根據がある。之は正に自由主義思想に基準するものである。消費者の主觀的満足、即ち利用と效用の程度が價格體系の根幹を爲す、現代經濟論に於ける限界效用遞減の法則乃至は限界效用均等の法則等は何れも消費者の需用に對する心理的現象を基準として生れた理論的法則に過ぎ無い。現代經濟論に於ける價

格體系と需要との關係は消費者の主觀的満足を中心とするもので、茲に價格變動の要因がある。
然して現代經濟論に於ける價格變動抑止の道は生産と消費者の所得(購買力)を均衡ならしめて需要に對應して往くと云ふ事のみである。

斯くて現代經濟論に於ける價格體系と需要との關係は消費者の自由意志の上に置かれて居る。而かも僅かに之を牽制する道は消費者の所得を限定すると云ふ事のみである。

二、國民需要と消費規正

然し需要が消費者(國民)の自由意志の上に置かれ生産も亦、民需のみを中心に行はれ國家目的の需要と云ふものは現代經濟論に於ける需要法則の上には全く民需以下に扱はれて居る譯である。而かも此の原理の上に今日の生産機構が組織されて居る。蓋し之は循環經濟の原理の上より至當の現象と云ふべきであるが、今日の如く國家經濟と國民經濟の一體化が絕對必須の要諦の如く經濟情勢の上に示現して來た場合、従來の如く國家需要と民需とを對立させて置く事の不合理は當然是正されねばならぬ事は言を俟たぬ處である。

茲に於て價格體系と需要の關係は従來の自由主義經濟理念を清算して、國家主義的經濟理念に基くものに改められねばならない。即ち民需は消費者(國民)の自由意志に基くものに非らずして、國家目的を中心に規正されねばならぬ譯である。従而、價格體系は需要を基準とせず、國民經濟と生産關係とを考慮せる適正價格制度に改められねばならぬ。

らな。茲に生産機構整備の重要性がある譯である。之れに關しては生産論に於て詳論する事にする。

然し國民需要を國家目的の中心に規正する方策が問題になる。現行の切符制は其通法の一つには違ひ無い。然し之を全面的に活用する事は實際問題として出來得ない場合がある。例へば配給量の加不足を是正し民需の適正を明する等は現に可成困難な状態に置かれて居る。之には市場の自由制等も考慮に入れる必要がある。茲に於て配給區域と配給量を規正すると共に、市場を統制して配給を圓滑ならしむる事が肝要である。今日の如く市場が無統制で配給網がバラバラでは配給量の不足のみが目立つて民需を刺戟するのみで、消費規正の如きは望み得ぬ事になる。而かも此事は關相場、關取引の根幹を爲すと共に、商人を必然的に不正に墮らしむるものと云ふべきである。

三、消費規正と價格體制

次に消費規正と共に問題視さるゝのは價格體系の問題である。誠に國民需要を國家目的の中心に規正すると云ふ事は従來の自由主義經濟論に於ける價格體系の根本的變革を意義するものであつて、今日の物價問題が行詰状態を示現せるものは、此の根本的觀念の誤謬に歸因するものである。

元來、需要と價格體系を切離すと云ふ事は循環經濟の原理を無視するもので、經濟活動の不圓滑を招來せしむるは寧ろ當然の現象と云ふべきである。加之、此の事が市場の自由制を歪曲せしめ、物資配給の不圓滑を招來せしむるは必然の事にて現行價格制が種々なる點に於て批判さるゝ所以である。

一四

茲に於て消費規正と價格體系との關係を循環經濟の原理に順應せしむる道は、生産と價格體系との關聯性を深化せしむる事である。之には生産原價中心の適正價格制度に據る外は無い。然るに現在の如く資材不足と需要増は勢い生産原價の昂騰を必然のものたらしめる。之には國民經濟力を向上せしめ以て、之に對應せしむる事が最も合理的である。之れ國民の經濟的立場確保が最も重要な經濟施策となる所以である。

然るに今日の政府の經濟施策には甚だ矛盾したものがある。即ち中小商工業對策、産業團體統制等を中心とする産業再編成方策である。此の事が如何に國民經濟力に悪影響を及ぼしつゝ居るかと云ふ事は今更説明の要の無い迄國民全大衆の間に知れ渡つて居る事實であつて、之を知ら無いのは政府當局と之に關聯を有する財界人のみである。

要するに國民需要を規正し國家目的に對應せしめる道は、國民生活の細部に迄、干渉する事よりも消費規正を合理化して國民消費を適正ならしむる事に依つて目的を達する譯である。

但し今日の經濟不安を激化する如き經濟施策が強行せらるゝ限り國民消費の規正は思想的に不可能となる事は必然の現象と云ふべきである。未完（昭和十六年八月二十日）

定價 一部 金五十錢也
一ヶ年 金五圓也

編輯兼 發行人 三 宮 維 信
東京市澁谷區代々木初臺町七二一番地

東京市澁谷區上通リ二二〇
印刷所 稻 垣 印 刷 所
電話青山七二五一番

東京市澁谷區代々木初臺町七一一番地
發行所 日 滿 經 濟 調 查 局
電話四谷二九七三番

(集談論情維宮三)

日滿經濟論壇

號四拾五第・月九年六拾和

昭和十二年十一月十日
昭和十六年九月廿八日
昭和十六年九月三十日

第三種郵便物認可
印刷納本
發行(每月一回三十日發行)

昭和十二年十一月十日第三種郵便物認可
昭和十六年八月三十日發行(每月三十日一回發行)日滿經濟論壇第五十三號(八月號)

卷頭言——革新と近衛内閣

企業合同と産業團體統制

臨戰體制下の財界情勢と財界人心理
産業團體統制と思想的矛盾
企業合同と資本的矛盾
産業合理化と機構的矛盾
經營能率増進と物價問題
政治經濟の一體化と財界人大臣の矛盾露呈

——論叢——

皇道經濟論(其八)

第貳編 流通經濟論

第參章 生産編